

## ライフリスク研究センター主催 シンポジウム

### アートのカークリエイティブ 経済と21世紀社会ー

同志社大学ライフリスク研究センターは、5月15日、寒梅館ハーディーホールで、アートのカークリエイティブ経済と21世紀社会ーをテーマにシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、東京大学情報学環教授の姜尚中氏が基調講演を行い、続いて、劇作家であり大阪大学教授の平田オリザ氏、ミュージシャンの佐野元春氏、武蔵野美術大学教授の岡部あおみ氏が加わりパネルディスカッションを行った。本シンポジウムは、事前予約制を取ったが、予約受付開始後2週間ほどで募集定員を超え、早々に受付終了の案内を出さざるを得なかったほど大きな反響を呼び、当日もハーディーホールは聴衆で埋め尽くされた。



基調講演では、姜尚中氏より絵画を例にとりながら、アートの本質的な力とは何かについてお話があった。そこでの重要なメッセージは、「生と死に直面した際の絶望からアートは生まれ

る」というものであった。このこと社会経済的意味づけは、現代社会が抱えている解答の無い諸問題をアートが引き受けることにより、個人の内面の葛藤に対する答えを導く力、それが、アートの方であると述べられた。

パネルディスカッションの冒頭に、コーディネーターの河島伸子経済学部教授から、シンポジウム開催の意義のひとつである、21世紀のクリエイティブ経済におけるアートの役割について説明があった。平田氏からは、情報社会の中で生まれてくるストレスを、芸術家が作った世界観を知ることにより、解決する糸口を見いだすことができることがアートの力の一つであるという意見が述べられた。そして、ロボット演劇の試みの意義について説明があった。

佐野氏からは、ソングライターが現代を生き抜く詩人であり、ポップソングは時代を超えたポエトリーであることが述べられ、優れた歌詞とは、1) 他者に対する優しい眼差しがあるか、2) 生存の意識が真剣に現れているか、3) 韻律（ビート）が同時性を持つか、4) 自己憐憫でなく他者に視点が存在する詩であるか、5) 普遍性があるか、6) 音と言葉と継ぎ目の無い連続性があるか、7) 共感を集めることに自覚的であるか、8) 良いユーモアの感覚があるか、といった基準を満たしたものであるという説明がなされた。

岡部氏からは、美術展覧会といった場において、アートの多様性を通じて、社会状況の認識とジェンダー等の理解が可能となることがアートの重要な力であるという主張が述べられた。また、コレクションの動向を見ると、アートの社会に対するメッセージと社会がアートに求める役割の変化を窺うことができることが述べられた。

ディスカッションでは、「絶望からアートが生まれる」という基調講演での主張に対して、自己を追い込み、内面をさらけ出す時に、アート技法を用いることにより新しい世界観が生まれるという解釈が加えられた。さらに、混迷した現実がアートを超えていく時代のアートとは何かという問題提起に対して、アートがコミュニケーション手段となるにより、混迷した現実に対して解を与えることができ、そこにユーモアが入ることにより、問題解決の可能性が広がることが述べられた。

3時間に及ぶ白熱した議論によって、21世紀の社会における「アートの力」に関する理解が深められ、盛況の内にシンポジウムは終了した。

(経済学部教授 八木 匡)